

お忙しくても、約 2 分間で読めます

山内公認会計士事務所

# ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

## 経営者への活きた言葉

### 従業員の不満の解決は、経営者の役割 永守 重信 (日本電産会長兼社長)

1. 特許法が改定されて、従業員と企業が特許権の帰属を巡って対立するような残念問題はなくなる。だが、本当にこれで対立はなくなるのだろうか。従業員と企業の間には紛争が起きるのは、特許法以前に社内にも問題があるのではないかと。そう思えてならない。企業の仕事は昔も今もチームで行うものである。日本企業がグローバルに事業を展開するようになった今は、なおさらそうだ。研究開発分野も同じ。発明者の周囲には助手もいれば、リサーチする人もいる。共同研究をする人もいる。示唆を与えてくれる先輩もいる。
2. そんな中で問題が起きるのは、特許や仕事の成果の帰属以前に組織に不満があるからだだろう。「提案を認めてくれない」「働いた成果を評価してくれない」「上司が必要な判断をしない」「自分のおかげで会社の業績が伸びたのに給料は増えない」…。従業員の気持ちは不満の山だと言っていい。しかし、大事なものはそこだ。人は必ず不満を持つもの。その前提に立って不満を解決し続けなければいい。それは経営者の役割だ。
3. 大事なものは上司が部下を成功させるようにしているかどうかだ。上司の役割の多くは部下を成功させることだとさえ言っていい。そのためには、しかることも必要になるが、それが直面する課題の解決につながるものなら部下は文句は言わないはず。「しかる」ということは、それくらい難しいが、必要なものだ。経営はコミュニケーションそのもの。そして、それは誰にでもできることだ。

(参考:「日経ビジネス」2015年8月10・17日号)

## 経営者のための理念・哲学

### 遠き<sup>おもんばか</sup>を慮る (その1)

1. 我が国の現代にも遠き慮りをされた先達がいる。例えば哲学者の森信三氏と事業家の松下幸之助氏はこういう言葉を残している。「2025年になったら、列国は日本の底力を認めざるを得なくなるだろう」森信三。「これからの日本は精神大国というか、徳行国家をめざして進んでいかなければならない」松下幸之助。
2. 日本がそういう国になるには、一人ひとりのありようが問われる。福澤諭吉の言葉が重なってくる。「独立自尊<sup>これ</sup>之修身」。修身とは一人ひとりが独立自尊することだというのである。この前提なくして国の未来はない。そしてその鍵を握るのは教育以外にない。二人の先達が示すビジョンに日本を近づけるべく、各人が遠き慮りをなさねばならない時が来ている。

(参考:「致知」:2015年11月号)

## 経営者のための歴史学

### 王道政治の実現

#### 童門 冬二 (作家)

1. お盆や年の暮れに故郷に帰省する人は「国」に帰りますと言う。日本国に帰るという意味ではない。「薩摩に帰ります」とか「越後に帰ります」という。大化の改新後、律令によって日本の国は壱岐対馬を含めて 68 カ国に分類され、それぞれ国名がつけられた。薩摩や越後はそのときの国名だ。
2. 江戸時代の名改革者といわれる大名や改革担当者の最大の苦労は、部下 (藩士) の意識改革にあった。米沢藩の上杉鷹山ら名君と呼ばれるのは、この意識改革と人材育成のための教育と研修に成功したためだ。改革の主目的はもちろん赤字財政の克服とその安定にある。しかし名君たちは単に財政という範囲で考えなかった。「経済」という言葉を「経世済民」(乱れた世を整え、苦しんでいる民を濟う) と考え、王道政治 (仁と徳を民に及ぼす) を実現した。

(参考:「週刊東洋経済」2015年9月5日号)

## 古典に学ぶ

### 道徳法則の掟

(解説) してみれば、武士道は、武士が守るよう求められ、また教えられた道徳法則の掟である。武士道は文字で記された掟ではない、せいぜいそれは口伝えにされてきたり、あるいは有名な武人や学者の筆になる、わずかばかりの格言から成っている。

(参考:新渡戸稲造著佐藤全弘訳「武士道」:教文館)